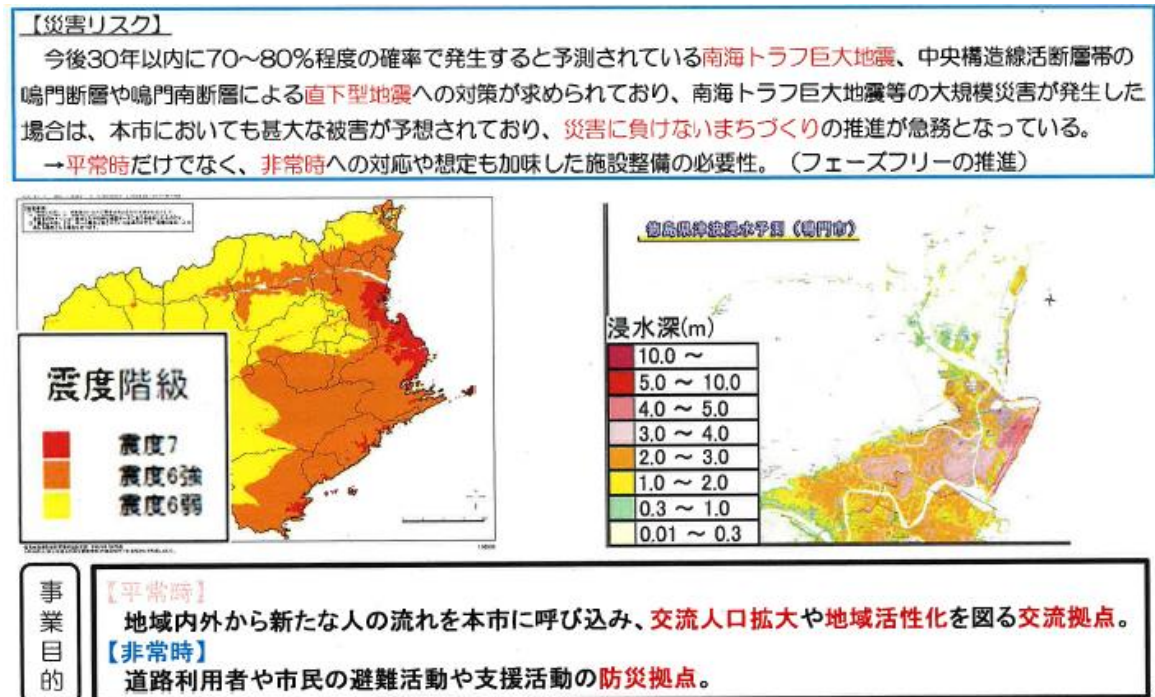


【鳴門市】

1. 市勢 市制施行 昭和 22 年 5 月 15 日
 人 口 53549 人（令和 6 年 4 月 1 日現在）
 面 積 135.66 平方キロメートル
2. 財政 令和 6 年度一般会計当初予算 282 億円
 令和 5 年度特別会計当初予算 237 億 2360 万円
 令和 5 年度企業会計当初予算 698 億 6210 万円
 合 計 1217 億 8570 万円
3. 議会 条例定数 22
 3 常任委員会（総務文教、生活福祉、産業建設）

4. 視察事項 災害対応と防災教育について

(1) 鳴門市の構造的な課題



上記の理由から地域の人口減少により減少した消費を旅行者による消費で補う必要があり、かつ、高速道路の整備により旅行者が四国の広範囲を移動するため、かなり広い範囲の他地域と競争して集客する必要があるため、道の駅を整備することになった。また、南海トラフ地震が発生した場合には大きな被害が出ることが予想される地域であるため、高い防災能力を持つ施設であることが求められた。

2. 四国のゲートウェイ推進プロジェクトの策定 H29.3

→「新しいにぎわい創出施策」を計画。その計画の中核プロジェクトとして、本市への実質的な出入口となる幹線道路沿いに、情報の受発信や賑わい、憩いの機能を持ち合わせた交流拠点施設（道の駅）を整備することで、**交流人口拡大と地域活性化**を図り、**本市が名実ともに四国の玄関口**としての認知度とブランド価値を高めるための施策。



上記の視点から、①車移動で10分から20分の場所にあり、日常用品などを買いに来る足元の顧客をターゲットにする商圈として足元商域、②車移動で30分から40分にある、週末のちょっとした観光で来場する消費者をターゲットとするミニ観光商圈、③車移動で40分以上かかる、観光客によるエリア観光の一環で来場する消費者をターゲットとする遠方観光商圈の3つをターゲットにすることで、交流人口の拡大と地域活性化を促進して、鳴門市の認知度向上を図ることとした。

近年の鳴門市は、道路が整備されることで交通の利便は良くなったものの、四国へ入ってくるときに通過するのみで、鳴門市でお金を使わない旅行者が激増し、近隣との非常に激しい競争にさらされている。その点で、この道の駅が話題になることは非常に有効である。

(2) 道の駅の概要

4. 道の駅の概要

所在地：鳴門市大津町備前島字蟹田の越338番地1

敷地面積：17,971㎡ 延床面積：2,996.13㎡ 階数：2階建て

施設：駐車場（171台）、トイレ（24器）、情報提供・休憩施設、観光案内所、ベビーコーナー、非常用電源、備蓄倉庫、貯水槽、公衆電話、公衆無線LAN、物販施設、飲食施設、加工室、体験交流研修室、屋内プレイルーム、屋外交流広場、子どもの遊び場、芝生広場、展望デッキ、バス停、レンタサイクル、EV充電施設



駐車場は国土交通省が整備し、広域的な災害が発生したときには、防災拠点駐車場という車両の基地になる。地域からは、身近にこのような施設があるのは心強いとの声がある。休日には駐車場に車が入りきらないので、道の駅周辺の土地を買収して駐車場を増やす検討をしている。

(3) 商業施設部分について

「体験型食のテーマパーク」がコンセプト

商品は、鳴門金時を中心に、
若者にも注目を集めるスイーツ等を設定



徳島・鳴門の名産品を中心にした豊富な品揃え
(一回の訪問では選べない、また来たい空間づくり)



災害時に活用する施設だからといってアルファ米など防災用品ばかり置くのではなく、売れる商品を置いている。発災時にはこれらを非常食として活用していく。約 2500 種類の商品を取り扱っている。

(1) 施設前面をガラス張り



日常時

・ランニングコストの低減

施設の中に自然光を取り込みやすくすることにより、屋内の照明コストの削減を図る。

・快適性と開放感の向上

晴れの日には施設が明るい雰囲気に入れられ、快適性と開放感が向上する。

・雨雲等の気象状況の早期察知が可能

視認性向上により建物外の災害状況をすばやく察知することができる。

非常時

(強風・豪雨などの異常気象)



14

施設の正面はガラス張りになっている。観光施設なので、見栄えが良く、開放感のある見た目にしたかったことと、屋内から天候を見ることができるので天候の変化を察知しやすくする目的がある。

(2) 施設屋上における子どもの遊び場、見晴らしデッキ、ジップライン



日常時

・憩いの場や交流機能

屋上には自由に遊べて憩いの場となる子どもの遊び場や、屋外の景色を眺めることができる見晴らしデッキを整備する。

・アクティビティ機能の付与による集客コンテンツ

屋上の形状を生かし、ジップラインを設置することにより、話題性とともに集客力の向上が期待できる。(津波避難場所を自然に意識することにも繋がる)

非常時

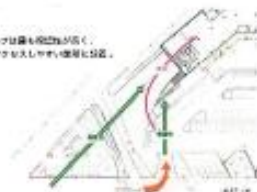
・津波の一時避難場所

非常時は津波避難が可能となる避難場所となる。屋外から直接アクセスすることができるので、施設が営業していない時間も含め24時間避難が可能。

スロープは最も視認性が高く、最もアクセスしやすい箇所に設置。

- ・バリアフリーで上げれる(誰でも)
- ・時間外でも上げれる(いつでも)
- ・迷いなく上げれる(早く)

スロープは最も視認性が高く、最もアクセスしやすい箇所に設置。



15

この道の駅のある場所の津波の想定波高は2～3mとなっている。その津波から避難

できる場所として、このデッキを整備している。津波避難タワーは、入口が階段や蹴破りドアになっていたり、鍵ボックスで開錠するようになっているが、訓練して使い方を学んでも、忘れてしまうことや次の担当者に引き継がれないなどのトラブルがある。この道の駅のデッキは 24 時間誰でも登れる。スロープになっているので、車いすの方でも後ろから誰かに押してもらえば登ることができる。

(4) 道の駅の効果

6. 道の駅の効果

※令和4年度実績

定量効果：年間来場者 約 1 2 0 万人
年間売上 約 1 5.5 億円

定性効果：1 0 0 を超えるメディア露出
(地域の魅力を全国に発信)



● 交流人口拡大と地域活性化を図る、**四国のゲートウェイ化**を着実に推進
→ **鳴門市自体の認知度・知名度向上**

19

道の駅の年間の委託料は約 1500 万円であり、年間売上の一部を市に還元してもらっている。市の歳入に 1 億円程度繰り入れている。繰り入れる金額は変動しており、だいたい 5 % 程度に落ち着いている。売上金額に応じて段階的に上がっていくので、今よりも増えれば 5.5% になったりする。還元されたお金は設備などの投資に回るので、防災訓練の内容を検討したりと、充実した対策ができる。

(5) 道の駅の特徴

道の駅「くるくる なると」

5. 道の駅の特徴

道の駅なると「くるくる なると」におけるフェーズフリーの主な機能

平常時 →

- ①災害予知・早期警報→
②災害発生→③被害評価→
④災害対応→⑤復旧復興の順に
災害対応サイクルが変わることを踏まえ、段階毎に機能を整理。



非常時のサイクル	機能	平常時の役割	非常時の役割
①災害予知・早期警報	施設前面をカラースペックル	・ランニングコストの削減 ・快適性と開放感の向上	雨雲等の気象状況の早期察知が可能
②災害発生	施設屋上における芝生広場、見晴らしデッキ、ジップライン	・憩いの場や交流機能 ・アクティビティ機能の付与による集客コンテンツ	避難場所（津波）
③被害評価	脱着が容易な天井柱・点検口	・メンテナンスしやすい仕様 ・イニシャルコストの低減	設備の損傷具合の状況把握を助けた被害の早期発見
④災害対応	・人工芝を敷き詰めたスロープ ・渦潮をモチーフにした滑り台	・子どもの遊び場（そり遊びなど） ・遊具	避難動線及び救援隊（車両）の動線
⑤復旧復興	バックヤード・倉庫	商品の保管場所	避難者への食料供給

13

鳴門の強みはレンコンや芋である。それらを有効活用し、しっかりと収益を上げたいと考えている。その中で、鳴門の立地を考えたとき、観光客の目的地にもなるが、発災時には広域的な応援やまちづくりにおける災害対応の視点が必要だと感じている。さらに、南海トラフ地震や中央構造線活断層、風水害のリスクもあるため、フェーズフリーに着目している。

現在、自治体がフェーズフリーを広げる段階にあるが、さまざまな民間施設やマーケティング用語としても日本で取り入れられ始めている。民間の動きが広がることで、裾野的にも影響が見られる。この施設や庁舎など、さまざまな取り組みの中でフェーズフリーを導入しているが、将来的にはバリアフリーのように自然と普及することを目指している。

(6) 施設見学

今回の視察は、担当者が施設を案内しながら概要説明と質疑応答を行った。物販を行う1階部分と、津波避難場所になっている展望デッキを含め、道の駅の防災機能について詳細な説明を受けた。



(担当者に説明を受ける様子)

(津波避難場所である展望デッキから見た道の駅)



(1階商業施設エリアにある避難はしご。店内から2階へすぐに避難できる)

(7) 委員からの主な質疑

Q. 近くに高速道路のインターチェンジがあるが、この道の駅を目的に高速道路を降りてくる客はいるか。

A. 来場者にアンケートを取ったことがあり、この道の駅を目的に来た人が3割、鳴門美術館が目的で途中で立ち寄った人が2割、残りの半分が付近を通過するついでに寄ったという人たちだった。

Q. 近年は淡路島観光が人気であり、島内で頻繁に渋滞が発生しているが、その渋滞に入る前にこの道の駅に寄っている客もいるのか。

A. 旅行帰りに立ち寄る客が大半であり、道の駅の前にある国道11号も混雑する。

Q. どこから来る客が多いのか。

A. 神戸市や大阪市、岡山市や香川県からの客が多い。

Q. 営業時間はどのように決めたのか。

A. この近辺の商店は午前9時から午後5時か午後6時までの営業が多いので、それを参考になっている。また、同じ敷地内にJ Aの直売所があり、そこが午前9時から午後6時までなので、それとも整合性を取っている。

Q. 24時間開放している部分はどこか。

A. 津波避難場所の役割がある展望デッキなど、金銭を扱う施設以外は24時間開放している。

Q. 道の駅の名前は公募か。

A. 公募で決めた。鳴門市に来てもらい、うずしおや「来る」を掛けていると聞いている。

Q. 道の駅の計画はいつから進めていたのか。

A. 平成30年度頃から進めていた。

Q. 道の駅の従業員数は。

A. 70人から80人程度が働いている。

Q. いつもの平日でもこんなににぎわっているのか。

A. 1月と2月以外は、平日の昼間でも混雑している。寄りやすい立地なのと、委託業者がメディア戦略を持っていて、テレビに出る機会も多いので、来場者は多い。全国に道の駅は約1200箇所あるが、制度ができた当初にできた道の駅は営業が苦しいところが多い。最近の道の駅はある程度マーケティングを考えて作っているので、うまくいっているところも多い。

Q. 道の駅ができるまで、この場所には何があったのか。

A. 芋畑があった。以前はイオンの出店計画があったが、当時は芋が高値で売れていたのに畑をしていたが、徐々に芋が売れなくなり、土地の値段も下がってきている。

【徳島県】

1. 市勢 県制施行 明治2年6月17日
人 口 688373人（令和6年4月1日現在）
面 積 4147.00平方キロメートル
2. 財政 令和6年度一般会計当初予算 5001億8900万円
 令和6年度特別会計当初予算 2152億5200万円
 令和6年度企業会計当初予算 492億5710万円
合 計 7645億8910万円
3. 議会 条例定数 38
 4 常任委員会
 （総務、経済、文教厚生、県土整備）
 3 特別委員会
 （まちづくり・魅力向上対策、防災・環境対策、地域活性化対策、こども未来・
 安心対策）
4. 視察事項 万代中央ふ頭の活性化について



（NPO法人アクアチッタ公式Y o u T u b eチャンネルより）

（1）団体の設立と課題

- ・NPO法人アクアチッタのミッションは、徳島市の中心部に位置する万代中央ふ頭に衣食住を備えた街を作ることである。
- ・万代中央ふ頭は、東西に約500m、面積約2.1ヘクタールの県有地で、20戸の倉庫な

どがある。

- ・立地は、徳島駅からは直線距離で約2km離れており、徒歩で約30分かかる。もっと近い位置にあれば利便性が良かったが、徒歩でここへ来るといよりは、車で来る人が多い。
- ・かつては貨物船でにぎわう港だったが、貨物船が大型化してくることに施設が対応できず、マリニピアという新しい港が沖に建設されたことに伴い、この地区の流通機能が移管され、街は次第に廃れていった。
- ・団体の活動開始の経緯は、理事長が自社の移転先を探していたときに、万代中央ふ頭
の倉庫に目を付けたことである。倉庫のオーナーとの交渉を進めて、話はスムーズに進んだ、契約の3日前に港湾法上の利用制限に抵触することが分かり、売買が白紙となった。
- ・その話を理事長が近隣の中小企業のオーナーたちに話したところ、そのオーナーたち
の中にも万代中央ふ頭に興味を持っている人がおり、そこにビジネスの可能性とこの
地域を活用し、盛り上げようという気持ちから、NPO法人アクアチッタを設立する
こととなった。
- ・まずは、不法投棄物だらけだったので掃除活動を行いつつ、活動方針を明確にするた
めに独自のマスタープランを策定した。
- ・まずはこの地区を知ってもらう必要があると考え、アクアチッタフェスというイベン
トを開催した。2005年からコロナ禍前までの2019年まで毎年開催し、最大で1万7000
人の集客があった。
- ・イベントの目玉として、生演奏での音楽花火を行い、これは日本で初めての試みで、
全国から注目を集めた。



(アクアチッタフェスタ 2019 のパンフレット)

(2) 行政との連携について

- ・万代中央ふ頭の周知を進めるにあたり、アクアチッタに所属する中小企業のオーナーたちは行政や議員との付き合いが苦手で、民間主体で活動していたが、県有地のため行政との協力が必須だと気づいた。
- ・行政と協議する中で、協働事業として、市や県と一緒に活動を始めることとなり、それによって活動資金の原資となる助成金も得られるようになった。様々な検討を行い、絵画コンクール「水辺の夢コンテスト」を開催した（徳島市協働支援事業）。この絵画コンクールは画力で優劣を競うのではなく、アイデアを重視して評価したコンテストで、子どもから大人まで幅広いアイデアが集まった。
- ・また、全国倉庫サミット in とくしま万代中央ふ頭を開催し、各地のまちづくりエリアのキーマンを招き、事例紹介やコミュニティデザイナーのクロストークを実施した。
- ・団体のキャリアアップとしてその他の協働事業や様々なコンテストへの参加を通じて、2017年には国土交通省の手づくり郷土賞^{ふるさと}グランプリ 2017を受賞するなど、さまざまな賞を受賞した。
- ・2010年には実証実験を行うためのワークショップも開催し、実証実験の前段とした。



(2014年開催の倉庫サミットのチラシ)

(3) 実証実験の成果

- ・団体がここに至った経緯は、ロビー活動がきっかけである。
- ・万代中央ふ頭の構想を進めるため、行政とNPO法人、地域住民、倉庫群のオーナーを交えて倉庫群の利活用を協議する「万代中央ふ頭にぎわいづくり協議会」が立ち上げ、川上や岸壁、倉庫の使い方、運営体制を考え、2011年4月に「万代中央ふ頭みな

とにぎわい空間創出実証実験」を開始した。

- ・実証実験では、行政と協議し、20 棟の倉庫のうち 3 棟を倉庫以外の用途に使うこととした。団体はそのうち 1 棟をコミュニティスペースとして運営した。
- ・コミュニティスペースは、レンタルフリースペースやカフェスペースとして利用され、チャットモンチーのメンバーの個展などのイベントも開催した。
- ・また、地域の路地を横断できる公園を作ることで、裏通りの人気が高まり、地域の見え方が変わった。
- ・現在、万代中央ふ頭には多くの事業者が参入し、街のプレーヤーが変わってきている。規制緩和により倉庫の多様な用途が可能となった。
- ・街の景観ルールを設け、事業提案を審査して入居を決定している。また、設計士の協力により、街づくりが進展した。
- ・収益構造は会員の会費収入と会場利用料金で成り立っている。助成金も受け取り、予算を集めて事業を実施。
- ・街の回遊性を高める必要があると考えており、その方法を検討している。街の中心に位置するエリアを活性化させ、訪問者が街全体を回遊する仕組みを作ることを目指している。

(4) 万代中央ふ頭のこれから

- ・万代コミュニティの連携が進展し、駐車場の問題が課題となっている。立地的に車で来る人が多く、週末は駐車場が慢性的に不足している。令和 6 年 6 月から県の協力により、万代中央ふ頭に隣接するエリアの県の職員用駐車場を週末に 120 台利用可能になった。
- ・近隣の大型スーパーへ勝手に駐車して万代中央ふ頭に来る人が多く、関係者と相談しながら対応を進めている。
- ・万代中央ふ頭のエリアの中に耐震基準に引っ掛かって活用できない建物があり、そこを取り壊して立体駐車場にする案がある。昔は、近くにもう 1 つ県職員の駐車場があったが、大型スーパーの出店場所になったため、駐車場はなくなった。観光客の大きなニーズがあり、その駐車場を利用していた県職員がいたということは県職員でのニーズもある。立体駐車場の建設に関しては、県の職員も利用できるようにし、週末にはイベント利用者向けに開放する計画がある。また、海辺なので津波対策として避難ビルとしても活用できることが見込まれる。

- ・川の駅の有効活用が進行中で、徳島市と協力し、観光資源としての周遊船を活用する計画がある。
- ・夜の来訪者を増やすため、倉庫のライトアップやベンチの設置などの取り組みが行われている。
- ・ウッドデッキや芝生エリアなどの整備を段階的に進め、街の発展を目指している。

(5) 施設見学



- ・説明にあった万代中央ふ頭のエリアを歩いて視察した。
- ・事前に説明者である岡部氏から店舗に対して視察があることを連絡してもらっており、店舗によっては、店主から店舗概要の説明を受けた。

(6) 委員からの主な質疑

Q. アクアチッタを設立した当初は清掃活動や万代中央ふ頭エリアに目を向けてもらうた

めに活動していたとの説明があったが、この時点では条例の規制緩和に向けた動きは考えていなかったのか。

A. そのとおりである。

Q. どのようにモチベーションを維持したのか。

A. サークル活動のような雰囲気が良かったのかもしれない。定期的に清掃活動を計画し、その時に来られるメンバーが参加する状態だった。いつも定期的に集まれる場を作ることと、行くと楽しいと思える場所があったことが大きいと思う。

Q. アクアチッタが存在しているところに後から万代コミュニティを作ったとのことだが、同じような組織が立ち上がることにアクアチッタのメンバーから反対意見はなかったのか。

A. なかったと認識している。万代中央ふ頭でのアクアチッタの活動に共感してくれた方々が万代コミュニティを作ろうと言ってくれた。精力的に活動していた設計士2人が「新規参入してきた事業者も、もっと万代中央ふ頭を盛り上げていかないといけない」と提案してくれたことも影響している。当初はアクアチッタの中に内部組織を作るべきではないかという意見もあったが、アクアチッタが表立って行動すると、公益性の高い表現になってしまい、話題性の高いことができなくなってしまう。それでは注目を集められないので、メンバーに上下関係のない並列な関係の組織として万代コミュニティを作った。

Q. 万代中央ふ頭も徳島市内のどこかの地区には属していると考えられるが、ふ頭を盛り上げることに對して地域からの反感はなかったのか。

A. 活動当初は地域との関係性に鈍感で感じていなかった。現在の関係はとても良好である。

Q. 音楽花火をすることに對して、地域住民から反対はなかったのか。四日市市は花火大会の打ち上げ場所と民家が近かったことで、よく苦情が届いていたが、そのようなことはないのか。

A. 対岸にあるマンションの平面駐車場に停まっている車が最も配慮すべきものだった。まずはマンションの管理組合にイベント内容を説明して理解を得て、住民に車の移動を呼び掛けてもらったり、移動が難しい場合は我々が車に保護シートを被せに行った。公園に花火の殻が落ちるので、イベントの翌朝に夜明けとともにごみを拾った。20人から30人は参加していたと思う。また、花火師に頼んで、なるべくカスの少ない花火を作ってもらった。

Q. ここは港湾区域で物販が禁止されていると思うが、どのように可能にしたのか。

A. 港湾法は適用されているままだが、荷役に利用されておらず、港湾施設の機能を果たしていないので、実証実験として港湾法の但し書きの部分（その他知事が特別に認める場合は、など）で特例的に運用している。本来であれば県の普通財産にして売却という手段も取るが、港湾区域の岸壁なので、それは難しい。

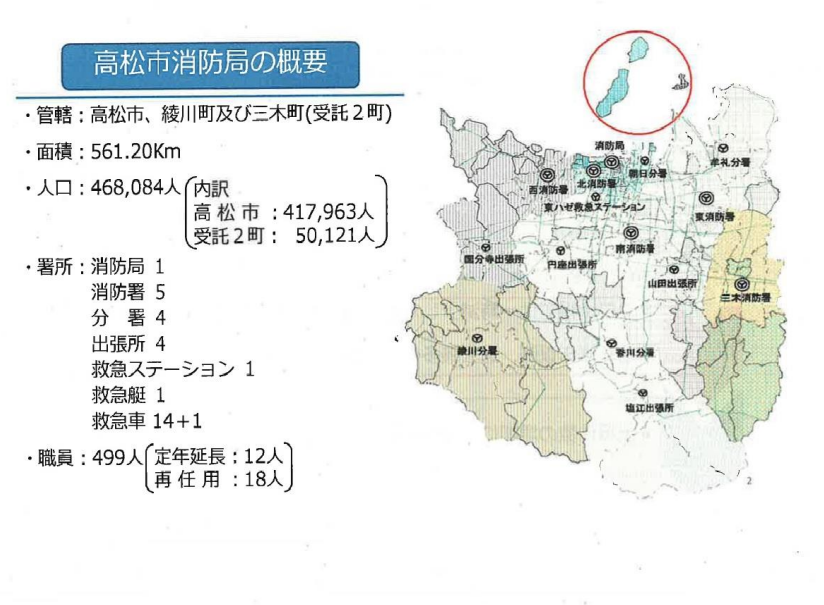
Q. 実証実験の成果が良かったから規制緩和につながったのか。

A. 港湾区域を柔軟に活用したり、運用・管理するために規制緩和を行った。野積み場に民間人が勝手に倉庫を建てたり、倉庫を建てた会社が倒産してしまい、倉庫は残っているが占有料は入ってこなかったり、放置しておくことは問題だった。

A. 実証実験自体に効果はないと考えている。アクアチッタの取り組みは、万代中央ふ頭の規制緩和が目的だったので、それが実現した以上、実証実験はただのデータ採取ではない。様々な取り組みを行ったことで、このような成果が得られ、今後、どのように更なる規制緩和を進めるかとか、活動に反映させていくかとか、その検討材料になることが活動の意味になっている。実証実験という名前のおり、様々な試行と検証ができることが強みであり、イベントで成功しようとは考えていない。

【高松市】

1. 市勢 市制施行 明治 23 年 2 月 15 日
人 口 417963 人（令和 6 年 4 月 1 日現在）
面 積 375.67 平方キロメートル
2. 財政 令和 6 年度一般会計当初予算 1719 億 0000 万円
 令和 6 年度特別会計当初予算 1183 億 2000 万円
 令和 5 年度企業会計当初予算 355 億 2232 万円
合 計 3257 億 4233 万円
3. 議会 条例定数 40
 4 常任委員会（総務、教育民生、経済環境、建設消防）
 3 特別委員会
 （総合交通対策、卸売市場再整備、観光エリア・附属医療施設整備）
4. 視察事項 日勤救急隊について
 （1）高松市消防局の概要



- ・詳細な状況については上記のとおり。
- ・救急ステーションについては、南署が新庁舎に移転した際に旧庁舎の跡地に設けた救急隊のみの出張所になっており、庁舎移転に伴う救急空白地を埋める役割を果たしている。

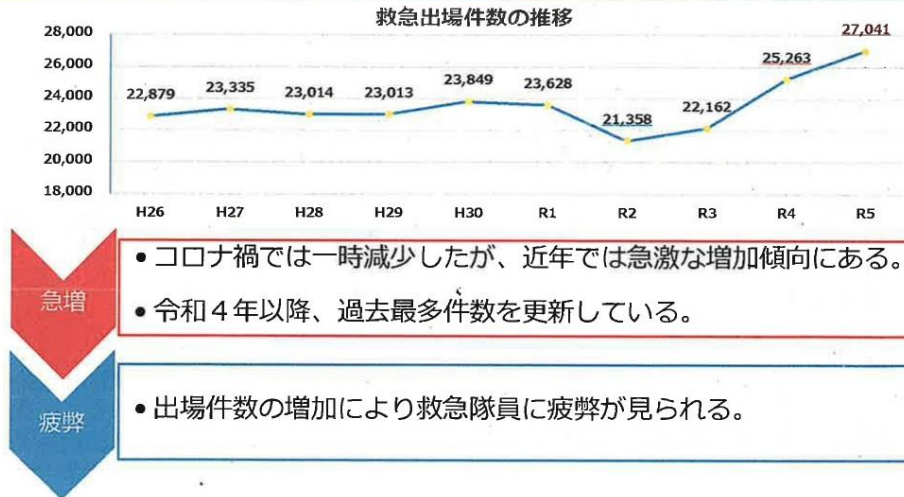
- ・救急艇は市の北部にある3つの有人島で発生した救急事案に対応するために平成23年度から運用開始している。沿岸部にある朝日分署が管轄している。

高松市消防局の概要

					令和6年4月1日現在				
地 勢 高 松 市 (美咲町含む)	面 積 375.67km ² (561.20km ²)	人 口 417,963人 (468,084人)	世帯数 203,826世帯 (226,016世帯)	人口密度 1,112人/km ² (834人/km ²)					
消 防 予 算 審 議 人 事	消防予算 59億9,932万円 消防費比率 3.49%	審 議 消防局1 消防署5 分 署4 出張所4 救急 ステーション1	職 員 数 定員 500人 実員 481人 (新規採用17人 再任用18人除く)	消防団員数 定員 1,710人 実員 1,331人	予 防 自 主 防 災 組 織	防火対象物 第1種 5,162対象物 第2種 9,788対象物	危険物施設 製造所 7施設 貯蔵所 775施設 取扱所 430施設	自主防火組織 高松地区 防火安全協会 386事業所 幼年・少年・女性 防火クラブ 106クラブ	※受託町（綾川 町・三木町）の業 務内容に消防団・ 消防水利は含まれ ておりません。
消 防 車 両 消 水 利	ポンプ車等 消防ポンプ車 15台 水槽付消防 ポンプ自動車 6台	特殊車両 化学機動車 1台 支援車 2台 先導巡回はしご車 3台 化学車 2台 電源照明車 1台 小型動力 ポンプ付水槽車 1台 津波・大規模 風水害対策車 1台	救急車等 高規格救急車 19台 救 急 艇 1艇 救助工作車 2台	公設消防水利 消火栓 7,467個 防火水槽 659基	火 災 救 急	火災件数 144件 (2.5日に1件) (高松市107件) (美咲町37件)	火災原因 第1位 たき火 26件 第2位 たばこ 19件 第3位 火入れ 15件	救急件数 27,041件 1日当たり74件	救急事由 第1位 急病 62.6% 第2位 一般負傷 16.1% 第3位 その他 11.3%

- ・転院搬送は救急出動件数のうちの「その他 11.3%」の部分に含まれている。

救急出場件数の現状



- 四日市市と同様、救急出動件数は増加している。
- 他都市では、救急件数の増加に伴う連続出場による疲労等により、注意散漫になり、走行不能に陥る重大な事故を起こす事案が発生している。早急な対応が必要である。

救急隊員の労務管理

《消防庁通知》



平成30年3月30日付「救急隊員の適正な労務管理の推進について」

- 全国の救急出場件数が過去最高を更新するなど、これまで以上に適正な労務管理が求められている。
- 効果的な労務管理方策の一つとして「**救急需要が増加する日勤時間帯のみ、再任用職員で編成する救急隊を運用する取組**」が示されている。

令和5年1月25日付「救急隊員の適正な労務管理の徹底について」

- 新型コロナウイルス感染症の感染拡大等の影響もあり、一部地域においては、令和4年中における救急出場件数の速報値が過去最多を更新している。
- 新型コロナウイルス感染症の感染者数については、減少傾向にある一方で、**救急搬送困難事案については、高い水準が継続しており、救急現場の労務負担は増大**していることから、**これまで以上に適正な労務管理が求められる。**

- 令和5年1月25日付消防庁通知によると、新型コロナウイルス感染症の感染者数は減少傾向にある一方で、現場滞在時間30分以上、病院問い合わせ回数4回以上のいわゆる

る「救急搬送困難事案」については高い水準で推移していることから、救急現場の労務負担が増大しており、救急隊員の適切な労務管理を徹底するように通知があった。

日勤救急隊導入の理由と業務内容等

導入の理由

- ・より緊急性の高い事案への即応性を高めるため。
- ・救急隊の労務負担の軽減を図るため。
- ・育児中の女性職員や定年延長等の職員の働き方の選択肢を増やすため。

業務内容等

- ・主な業務：「転院搬送に特化した救急搬送」と「応急手当の普及啓発活動」
- ・出場時間：平日(月曜～金曜)の午前9時から午後4時の間に覚知した事案
- ・出場範囲：医療機関が多く点在し、転院搬送が集中する市内中心部
- ・配属職員：6人(定年延長職員：2人、再任用職員：2人、男女職員：各1人)
- ・使用車両：予備救急車

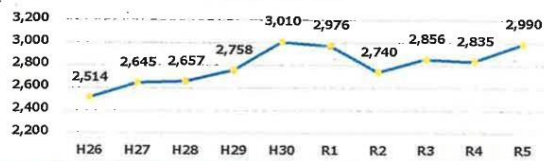
- ・日勤救急隊は、管内中心地にある高松南消防署に配置している。
- ・日勤救急隊の出場範囲は表のとおりだが、運用の効率化を図っている。
- ・配属職員は男性5名、女性1名で、うち4名が救急救命士の資格を持っている。

転院搬送の現状と導入により見込まれる効果

転院搬送の現状

- ・救急出場件数全体の約12～13%を占める。
- ・将来にわたって大幅な減少に転じる見込みは少ない。
- ・傷病者は医療従事者の管理下にあることから、緊急度は比較的低い事案が多い。

転院搬送件数の推移



導入により見込まれる効果

- ・転院搬送は日中の時間帯に集中している。
- ・年間900件程度の転院搬送に対応できると試算。
- ・転院搬送以外の事案に対する即応性の向上が見込まれる。
- ・正規救急隊の労務負担の軽減を図る。

転院搬送の時間別要請件数（令和4年：2835件）



活動状況、職員からの意見及び今後の活用について

活動状況（令和6年6月末時点）

- ・運用開始：令和6年5月1日
- ・出場件数：114件（5月：58件 6月：56件）
- ・救急講習：普通救命講習 27回（5月：11回 6月：16回）
その他の講習 26回（5月：17回 6月：8回）

職員からの意見

- ・正規救急隊員からは、労務負担が軽減したとの声が聞かれる。
- ・定年延長職員等が培ってきたスキルや救急救命士の資格を有効活用できている。
- ・高齢期職員に対し、比較的労務負担の少ない職場環境を提供できている。

今後の活用について

- ・隊員の増員については、配置可能人員によるが、最低6人は確保したい。
- ・事業を拡大する予定については、救急需要を見極める中で、今後の対応を検討する。

8

- ・運用時間は午前9時から午後4時で、その時間内に通報があった転院搬送事案に対応している。
- ・令和6年5月1日から6月30日までの間で、337件の救急出場があり、そのうちの114

件（約 34%）が転院搬送事案で、日勤救急隊が対応している。

（２）消防艇「せとのあかり」への乗船による視察

- ・各委員から搭載された電動ストレッチャーについてなど、適宜、質疑を行った。



せとのあかり 主要目

		船主	高松市
		起工	平成 22 年 5 月
		進水	平成 22 年 9 月
1. 船 体	軽合金製V型軽構造	5. 機 関	主 機 関 ヤンマー 6AYP-GT 610kw(829PS)×2基
船質・船型	全 長 18.80M	補 助 機 関	ヤンマー 4JHL-HTN 23.5kw(32PS)×1基
主要寸法	登録長さ 18.00M	6. 航海設備	磁気コンパス 探照灯
	幅 4.00M	汽 笛 レーダー	
	深 さ 2.00M	風向風速計 GPSプロッター	
	総トン数 19トン	7. 救急・救助・消防用具	
2. 性 能	最高速力 33.06Kt	救助用プラットフォーム	
	巡航速力 27.31Kt	電動タラップ	
3. 定 員	18名	小型救助艇及びダビット	
4. 賞 格	平水区域	酸素吸入装置	
		人工呼吸器、吸引器	

（３）委員からの主な質疑

- Q. 職員の定員が約 500 人とのことだが、定年延長や再任用者は実数に含まれるのか。
- A. 定年延長者は 12 人で、再雇用が 18 人である。高松市消防局では定数外の扱いになっている。正規職員とは勤務時間が異なる。
- Q. 四日市市消防本部では、定員に近い人数の消防職員はいるものの、需要に対して人員が不足している状況だが、高松市はどうか。
- A. 全国的に状況は同じであり、出場体制の見直しなど対策に苦労している。活用可能な人数の中で調整している。その中で始めた取組が日勤救急隊である。予備車を使って、泊まり勤務ができない育児中の職員や、管理職になって一度は現場を離れたことによるブランクのある定年延長の職員を日勤救急隊に配属している。転院搬送が必要な傷病者は、医療機関の管理下にあり、緊急度が比較的低い。そのため、日勤救急隊が転院搬送を担うことで、現役の職員を効率的に活用することができるようになる。

Q. 高松市中心地に医療機関が集まっているとあったが、総合病院など大病院はいくつあるのか。

A. 三次医療機関が 2 病院、二次医療機関が 5 病院、その他は個人病院である。

Q. 平日の昼間のみとのことだが、負担軽減になっているのか。

A. 医療機関の診察時間が平日の昼間であり、医療機関での診察の際に担当医が転院を決めるため、転院搬送の需要は平日の昼間が多くなる。転院搬送の全てをカバーしているわけではないが、大部分を日勤救急隊が担っている。現在想定している状況以外の事案が発生すれば、それに日勤救急隊を活用できるかを検討することになる。

Q. 日勤救急隊に自ら志願する職員はいるのか。また、給与などは他の定年延長職員などとは異なるのか。

A. 定年延長や再任用は給与額の 7 割となっていることは、全国一律なので変わらないと考える。救急隊員だった職員が、役職が上がって現場を離れ、役職定年を迎えた後に突然、救急現場に戻るようになるのは負担が大きかった。しかし、そのような職員でも安心して働けるポストが新たに設けられたので嬉しいとの声があった。

Q. 日勤救急隊ができたことにより、119 通報を受けてから現場到着までの時間短縮に繋がったのか。

A. 運用開始して 2 ヶ月であり、そこまでのデータは取れていない。病院が多いので、元々、全国と比較して短時間である。救急件数は増えているものの、医療機関数は増えないので対応してもらえないことが増えている。市外へ搬送する場合も出てきているので、それを考慮すると、1 件当たりの対応時間は長くなる可能性がある。

Q. 救急出動件数は増加し続けているので、対応策の一つとして日勤救急隊を創設したとのことだが、この傾向をどう考えるか。

A. 本市は定年延長者や再任用の職員で日勤救急隊を組織したが、通常の救急隊を 1 隊増やして対応している自治体もある。高松市は女性を中心とした働き方に重きを置いている。高松市消防局は女性職員の比率が 3 % に満たないので、もっと女性職員を採用したいが、そもそも試験を受けてもらえない実情がある。日勤救急隊を設けることで、少しでも女性に採用を考えてもらえればと考えている。

Q. 日勤救急隊に配属されている女性職員 1 名からはどんな感想を持っているのか。

A. 当該職員は救急隊ではなく、予防業務が多い職員だった。当初は初めての救急業務で不安だったとのことだが、出動時間が平日の日中に限られており、定時に帰宅できるため、時間を有効に活用できるので、自分の働くことができる場所が増えたことに喜んで

いた。

Q. 日勤救急隊を6人にした理由を確認したい。

A. 日勤救急隊の職員の中には、普通救命講習を行っている職員も含まれている。その職員は講習も行いつつ、転院搬送にも出動しているので、6人でいいかは実績を見て検討していく必要がある。ただし、午前と午後にそれぞれ2回ずつ転院搬送に出動すると、昼食も取れないほど活動し続けることになるので、今後の編成は検討する。

Q. 日勤救急隊はシフト制なのか。

A. 平日の昼間のみなので、週休2日制で平日は毎日出勤している。

Q. 一般の救急隊から日勤救急隊に異動を希望する職員はいるか。

A. まだ異動希望を取る時期に達していないので予想にはなるが、定年延長者から希望する声もある。

Q. 女性職員が日勤救急隊への異動を希望した場合、女性職員が増える可能性はあるか。固定で1名だけなのか。

A. 日勤救急隊での女性職員の比率が上がっていく可能性はある。定年延長者からのニーズもあるので、その辺りは調整していくことになるかと予想している。

Ⅲ. 各視察都市の所感

(1) 鳴門市

鳴門市は人口減少に伴う消費減を旅行者の消費で補い、地域活性化を図るために道の駅を整備した。この地域は南海トラフ地震のリスクが高いため、高い防災能力を持つ施設が求められた。足元商域、ミニ観光商圈、遠方観光商圈の3つのターゲットを設定し、交流人口の拡大と地域認知度向上を目指している。

道の駅の駐車場は防災拠点としても機能し、広域的な災害が発生したときには、災害対応に稼働する車両基地となる。津波避難を想定した展望デッキは24時間誰でも利用可能で、バリアフリー設計となっており、傾斜は急だが、後ろから押してもらえば車椅子の方でも利用できる。また、施設の正面はガラス張りで開放感があり、見栄えも良いが、発災時には外の様子を常に見ることができる。

商業施設部分では約2500種類の商品を取り扱い、災害時には非常食として活用する。特産品であるレンコンや芋を活用し、メディアに取り上げてもらえることを、収益を上げることも目指している。道の駅の年間委託料は約1500万円で、市の歳入

に年間 1 億円程度繰り入れられており、これにより防災対策が充実する。

さらに、この道の駅の最大の特徴はフェーズフリーの概念も導入し、日常生活で使える防災施設としていることである。フェーズフリーの考え方は、鳴門市の防災指針にも位置付けられ、危機管理担当部局のみならず、子供たちの教育にも取り入れ、市全体で推進している。

本市でも北勢バイパスの整備に伴い、防災機能を持つ道の駅の設置に向けた整備を行うことを表明している。現在は、その構想を考え始める段階で、内容などについては未定だが、この「道の駅くるくるなと」のようなフェーズフリーの考え方にに基づき、日常的ににぎわい、また、発災時には住民から頼りになる施設が求められる。

(2) 徳島県

NPO法人アクアチッタは、徳島市の中心部に位置する万代中央ふ頭の活性化を目指し設立された団体である。万代中央ふ頭はかつて貨物船で賑わっていたが、貨物船の大型化に施設が対応できず、また、大型化した貨物船に対応した新しい港の建設に伴い流通機能が移管され、徐々に廃れていった。団体の活動は、理事長が倉庫の利用を試みたことがきっかけであり、不法投棄物の掃除活動から始まった。

活動の一環として、アクアチッタフェスというイベントを開催し、最大で 1 万 7000 人の集客を達成した。また、絵画コンクールや倉庫サミットなどのイベントも実施や、行政との協力により実証実験を行い、地域の活性化を図った。

実証実験として、倉庫の一部をコミュニティスペースとして利用したほか、イベントの開催や公園の整備を行った。これにより、世間からの万代中央ふ頭の見え方が変わり、有名店を含めた多くの事業者が参入するようになった。

今後の課題として、駐車場の不足問題が挙げられている。県の協力により、週末には県の職員用駐車場を利用可能とする計画が進行中である。また、耐震基準に引っ掛かっている建物を取り壊し、立体駐車場の建設も構想している。その他、川の駅の有効活用や倉庫のライトアップなどの取り組みも進められており、街の更なる発展が期待されている。

本市の四日市港で旧港と呼ばれる千歳地区では、現在、「四日市みなとまちづくりプラン」を策定し、モノ・ヒトがともに集う「出会い・憩い・賑わいのみなとまち」を目指して、施設整備などを行っている。その中の課題として、「みなとまちづくり」を推進させるためには、地域の中で積極的に関わり、活動してくれる担い手が必要

である。また、将来的な整備メニューの妥当性を検証するための継続的なイベントの企画・実施を担う組織や財源が必要である」とあり、万代中央ふ頭のNPO法人アクアチッタに相当する団体が不足していることが課題となっている。四日市みなとまちづくり協議会が主体となって様々なイベントを開催し、ある程度の集客はできているものの、旧港の認知度は大きく向上してはいない。

万代中央ふ頭の活性化は、2005年から地域住民の有志が地道な活動を行い、20年の歳月を経て人気スポットになった。このように、地域への愛情と熱を持った人材が四日市港にも必要であると考ええる。

(3) 高松市

高松南消防署に配置された日勤救急隊は、午前9時から午後4時までの間、転院搬送を中心に活動している。配属職員は6名で、そのうち4名が救急救命士資格を持ち、男女比も均等である。この運用により、緊急性の高い事案への即応性が向上し、救急隊の労務負担の軽減が図られている。また、育児中の女性職員や定年延長職員の働き方の選択肢も増やされている。

令和6年5月1日の運用開始から6月30日の間に337件の救急出場があり、そのうち114件(約34%)が転院搬送事案であった。転院搬送は医療機関が多く集まる市内中心部で多く発生し、年間900件程度の対応が見込まれている。これにより、正規救急隊の即応性も向上すると期待されている。職員からは労務負担が軽減したとの声があり、定年延長職員のスキルや資格も有効活用されている。今後の展望としては、最低6名の配置を維持しつつ、救急需要を見極めながら事業の拡大を検討する予定である。

昨今はどの業界でも人材不足であり、消防職員など専門的な知識が必要な人材の確保は急務である。定年退職などで人員が減少し続け、入る職員よりも出る職員が多い状況が続けば、在籍する職員の労務負担は増加し、体制の維持が難しくなる恐れがある。本市の消防本部も例外ではないと考える。

その対応策として、高松市が導入した対策が日勤救急隊である。職員からの評判は良好で、特に役職定年間近の職員にとっては、平日の昼間のみの仕事であり、緊急性の低い業務なので心理的な負担が軽く、定年延長後の仕事として期待する声もある。柔軟な働き方の選択肢として、全国での検討も広まっており、本市でも令和7年4月から導入される。十分な検証を行い、業務に支障のない運用が求められる。